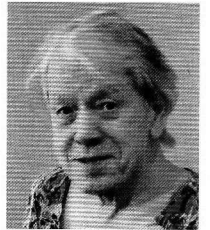


## —母との思い出—

作家 志茂田 景樹



母は1900年丁度（1900年）に生まれた。94歳で逝ったが、健在なら114歳になる。西暦年数から1900を引けば、その年の母の年齢が解るから後の者には便利でいい。

母は気丈な性格で、何ごとにも動じなかった。大学時代、単位不足で留年が決まったとき、学費は親に出してもらっているから、それを告げるときは、やはり、遠慮しいしいになる。しかし、母から還ってきた答えは、「そう」の一言だった。

この鷹揚さに味をしめて、僕は次の年もゆうゆう留年した。そのときも、そう、の一言ですんだ。さて、私の顔も三度かどうか、3年目の反応を確認しなかったが、留年2年であつかりすべての単位を取得してしまつたのでそれは永遠の謎になった。

その鷹揚な母は地震には至つて敏感だった。父を含む僕ら家族がやつと微かな揺れに気づいた頃には、母はガス焔炉などの火の始末をすませ、とつとくに外へ飛びだしていた。

そのときの敏捷さは物の怪が取り憑いたようであり、80歳を過ぎても脱兎のようだった。

母は23歳のときに、被害の規模としては未曾有のものになった大震災を体験している。つまり1923年9月1日11時58分23秒に起きた関東大震災の被災者だった。

母はその前年に婚約が整い、翌春、伊豆の宇佐美から上京して当時の本所区にあつた技芸学校に入った。料理と裁縫を教える学校、つまり、花嫁修業学校である。因みに、後に僕の父になる母の婚約者は鉄道省線（後の国鉄）の鉄道員で、当時は鉄道省熱海建設事務所（現熱海建設事務所）に所属して丹那トンネルの工事に従事していた。小田原市の実家から熱海の現場に通勤していた。

技芸学校の寮住まいだった母は道を渡ればある校舎に通う日々だった。昼食を寮生たちは寮に戻ってみんなで作って食べた。

その日もごく普通に寮に戻り火をおこして昼食の支度にかかった。ぐらりと思わず尻餅をつくほどの揺れがきたのは、そのときだった。烈しい揺れが続いて、母たち数十名の寮生たちは悲鳴を上げて外へ飛び出した。逃げ惑う人たちが道は混乱を極め、家々から出火が始まっていた。当時の本所はほとんどが平屋か、二階屋の木造家屋の密集地である。逃げ惑っているうちに行く手が火の海になり、方角を変えたとすつちにも火の手が迫っているという状態で、右往左往して逃げ道を見つけないければならなかった。気がついたときには寮生の全員と離れ離れになっていたという。

髪の毛や、着物を焦がしながらも、母は火の手に追われないうところへ脱出することができた。九死に一生を得たのである。

母はそれから東伊豆の宇佐美を目指して徒歩の逃避行を敢行した。東海方面の避難者の群れに入り、沿道の人たちから炊き出しの施しを受け、夜は寺院、学校、役場などに宿泊した。

酒匂川までくると鉄橋は通行不能で、小舟が何艘も臨時の渡し船になつて対岸とこつち岸をしきりに行き来していた。順番を待つてやつと対岸に渡ると、被災者が大勢群れて休んでいた。肉親の安否を尋ねまわっている人が何人もいた。

「ホリエ・ツヤさんはいませんか、ホリエ・ツヤさんの消息をご存じの方はいませんか？」

自分のフルネームを叫ぶ聞き覚えのある声に、母がハツとしてその声の方角を見ると、婚約者だった。

母は夢中で婚約者の名を呼びながら駆けだした。

その日は婚約者の実家へ泊り、次の日、婚約者に送られながら、母は無事、宇佐美の実家にたどり着いている。その年のうちに、母たちは結婚した。

寮生で火の手から生き延びることができたのは、母を入れて5人だったという。寮を逃げだしてから実家に辿り着くまでの様子を母が詳細に僕に語つたのは、母が亡くなる年の初夏のことだった。

僕は年に2、3回、東北被災地の慰問を行っているが、そのときいつも火の海を逃げる母の姿が脳裏に浮かぶ。火の手も津波もあつという間に襲いかかってきてすべてを奪っていく。情け容赦がないのは同じである。

このところ、地震の微かな揺れに敏感になった。亡母のトラウマが乗り移ってきたのかもしれない。

ということは、東京直下型の大地震が近いのか。皆々様、ご用心ですぞ。